

*40 cm反射望遠鏡主・副鏡収蔵

この40 cm反射望遠鏡の主鏡と副鏡のセットを筆者が入手したのは何年も前のことである。アーカイブ新聞第766号(2015年1月28日)に「反射望遠鏡30 cm主鏡収蔵」という記事を書いて、40 cm反射望遠鏡の主鏡・副鏡について記事にしていなかったことを思い出したので遅くなったが記録にとどめておきたい。この望遠鏡は東京大学理学部天文学教室にあったものだ。東京大学で処分するとき、筆者がアーカイブの仕事をするよりずっと前のことではあったが天文学教室にいた田中済氏から私に譲渡されたものである。

この40 cm反射鏡を搭載した当時の写真を掲載したいのだが、この40 cm反射鏡を筆者に託した田中済氏が東京大学天文学教室の助手になった頃には、天文学教室の望遠鏡はすでに60 cm反射望遠鏡に代わっていたので40 cm反射望遠鏡の写真を撮った記憶がないとのことである。田中済氏から、「この40 cm反射望遠鏡の光学系は木辺成磨氏が研磨した木辺鏡と呼ばれるもので、望遠鏡の機械系は西村製作所製だったそうである。東京大学天文学教室が麻布から弥生キャンパスに移転した際、この40 cm反射望遠鏡も麻布から弥生キャンパスに移転されたという。この望遠鏡の駆動は、錘とガバナーによる駆動であったがシンクロナス・モーターに交換された。鏡筒も剛性のない望遠鏡で、駆動むらも大変大きかったそうである。鏡筒は鉄板を円筒形にしたもので、ドイツ式の赤道儀でした。最初はニュートン焦点もあったようですが、カセグレン焦点に測光器と分光器を取り付けて学生実習に使われていた。」という情報が寄せられた。



写真1 木箱に入った状態



写真2 木箱のふたを開けたところ

写真1が、筆者が保管している木箱の外観、この木箱は筆者の手製である。木箱のふたに「Φ40 cm放物面鏡(教室のTelescope)」と書いてある。写真2が木箱の蓋を開けたとこ

ろで、ミラーセルに入った蓋をされた主鏡と、蓋がされた副鏡がセルに入ったものの 2 点が入っている。望遠鏡の反射鏡はセルに入った状態が一番安全である。

筆者としては、長い期間、30 cm 反射望遠鏡で変光星の観測をしていたこともあり、この 40 cm 主鏡と副鏡を、何時かは望遠鏡として復活させようと思っていたが、もはやその機会はないだろう。地方公共団体が作る天文台もだんだん大きくなり、1 cm でも大きくして大きさを競ったこともあり、今では 1m を超えるものが多い。しかし、そのブームも怪しくなり、廃止される天文台も多く、香川県に設立された天体望遠鏡博物館には廃止された天文台から譲渡された望遠鏡がたくさん集められている時代である。

写真 3 が蓋を取った 40 cm 反射鏡、写真 4 が蓋を取った副鏡である。



写真 3 40 cm 主鏡



写真 4 副鏡

この東京大学天文学教室にあったこの 40 cm 反射望遠鏡は、今では一線を退いたであろう大学の先生になった人たちが教育実習の望遠鏡として使ったものである。国立天文台にできるであろう博物館の収蔵品として保存しておきたい。

これらアーカイブ新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp